

Ⅲ-3 [コラム] 湯舟坂2号墳の 発掘調査をふりかえる

奥村 清一郎

1. 棚田の地下から巨大横穴式石室が出現

調査前の湯舟坂2号墳は、棚田と棚田との間の法面にいくつかの花崗岩が散乱している状態であった。散乱した浮石を取り除いた段階で、これらの集石部は横穴式石室の開口部であることがわかってきた。さらに掘り進めていくと、水田面の下から天井石が取り除かれただけの、良好な保存状態を保つ横穴式石室が見いだされた。

古墳を開墾して水田化する工事が行われたとき、天井石については橋脚の礎石や庭石として転用されたという話が地元には伝えられている。その跡に残された空間に墳丘盛土を投入して埋め戻し、地ならしをした後、水田として長らく土地利用されてきたため、横穴式石室の床面が埋葬当時そのままの状態で検出されたと思われる。土地所有者の辻さんは、「この田は水を入れても入れてもすぐ抜ける、水もちの悪い作りにくい田やった」と話されていた。天井石のない横穴式石室の上での水田耕作であるので、やむを得ないものと考えられる。

2. 須田の古墳から金が出た

石室内に堆積した土砂を慎重に掘り下げ、床面近くまで達すると、須恵器や鉄製品などの副葬品が石室内のあちらこちらから姿を現し始める（写真1・2）。発掘開始から10日あまりたった、1981年（昭和56）10月3日（土）、棒状の金銅製品が見つかった。地元老人クラブの会長で、作業員チームの取りまとめ役であった稲美さんが「金だ！金が出た！」と大声で私に報告に来られた。このとき土中から姿を現した棒状の金銅製品は、10月8日（木）の時点で

金銅装環頭大刀の鞘の一部だったことが判明した。とくに鞘尻部の金銅板は残りがよく、金の延べ棒と間違えられそうな出土状況であった。

10月中旬、「須田の古墳から金が出た」というウワサが徐々に町内に広まり、ウワサの金をひと目見ようとする方々が、



写真1 奥壁部遺物出土状態



写真2 石室内発掘調査の様子



写真3 土層剥ぎ取り転写の様子



写真4 現地説明会のにぎわい

連日発掘現場の見学に来られるようになった。この頃から文化財関係者の視察や、埋蔵文化財担当専門職の仲間たちの見学などの機会が多くなり、接客対応に追われる日々が続いた。

墳丘の形や規模を確定するためのトレンチ調査や、石室の構築法を調べるための断ち割り調査については、体力を要する荒掘り作業が中心となるので、須田郷土研究会に依頼し短期間で完掘していただいた。この助っ人は、本当にありがたかった。石室の裏側を断ち割った土層断面については、奈良国立文化財研究所の協力を得て、当時としては目新しい技術であった土層剥ぎ取り転写を行い、地層の現物標本を作製した（写真3）。完成した標本は、現在、京都府立丹後郷土資料館で保管されている。

3. 記者発表・現地説明会

10月27日（火）、午前10時から記者発表を実施したところ、大きな反響を呼び、新聞やテレビ各社の取材対応に追われる一日となった。川上小学校の校庭に取材のヘリが着陸したこともあって、報道後の発掘現場は記録作成作業と現地説明会準備に加えて見学者・来客の対応で、多忙を極めた。

10月31日（土）、午後2時から現地説明会を実施した（写真4）。須田郷土研究会の協力のもと、午前から現場では説明用の看板設置作業等を行い、遺物展示会場となった須田公民館では金銅装環頭大刀をはじめとする出土品の陳列作業を行った。説明会には町の内外から大勢の見学者が詰めかけ、午後の約半日を費やして、古墳の発掘現場と出土品を見学された。

11月2日（月）、現地説明会の第2弾として久美浜町内の小・中・高校生を対象とする青少年教室を開催した。これで、久美浜町に住む老若男女の大半が湯舟坂2号墳を訪れたことになると思われた。

4. 石敷欠落部の真相

湯舟坂2号墳の横穴式石室は、玄室の床面が川原石を敷き並べた石敷面となっているが、玄室中央部やや奥寄りの位置に限って石敷が施されていない箇所が見られた（写真5）。この石敷欠落部の意味するところについては、報告書をまとめる段階でも成案を得ることなく、意味不明として長らく見解を保留してきた。

調査後、約四半世紀を経た2006年（平成18）に京都府立丹後郷土資料館に転勤してきた時、展示解説等でこの石敷欠落部を再考する機会を得た。石室の保存状態は、遺物出土状態等から見てきわめて良好で、後世の盗掘や乱掘の形跡は認められなかった。したがってこの石敷欠落部は、古墳築造当初からの遺構と認められる。私は石室完成後に、まず木製品が安置され、その後に石敷が施工されたと考えた。この木製品は直径50cm前後、高さ1m前後の一木造りの棺台と推定した。



写真5 石敷欠落部の様子



写真6 石室完掘状態

墳・湯舟坂2号墳の2基の首長墓系古墳が連続して営まれる。平野古墳は丘陵の稜線上に営まれた前方後円墳で、後円部より少し下がった位置に前方部が取り付く。後円部には巨石を用いて構築された両袖式横穴式石室が完存している。築造年代は6世紀中葉、竹野川流域の新戸古墳とともに丹後地域最後の前方後円墳と評価される。湯舟坂2号墳は、丘陵の先端部に築造された、直径約20mの円墳で、巨石を用いて構築された両袖式の横穴式石室を内部主体とする(写真6)。築造年代は6世紀後半代で、その後7世紀前半代まで追葬が行われたことが、調査で解明された。

これら4基の首長墓系古墳は、川上谷に息づいた川上氏の棟梁が歴代にわたって造営し続けた首長墓だと考えられる。川上氏は、4世紀頃には、丹後半島の北部、タカノの地に成立した初期丹波王権と婚姻関係を結んだとする伝承が残る。川上氏はその後も順調に勢力を伸張し、6世紀代には伯耆谷を本拠地に熊野郡全域を支配下に置く雄族となったと考えられる。

5. 川上谷川流域の首長墓系譜

川上谷川流域に営まれた首長墓系古墳の系譜をたどると、古墳時代前期の島茶臼山古墳(前方後円墳)に始まり、古墳時代中期の芦高神社古墳(円墳)を経て、古墳時代後期の平野古墳(前方後円墳)・湯舟坂2号墳(円墳)へと継承されたと考えられる。

このうち島茶臼山古墳は、丘陵上に築かれた全長約40mの前方後円墳で、墳丘の主軸線が「く」の字状に屈曲する左右非対称形プランの古墳である。ヤマト王権の影響があまり認められない、地方色豊かな前方後円墳と思われる。芦高神社古墳は平野部に営まれた中期古墳である。もとは前方後円墳で、前方部が開墾によって水田化されたとみる前方後円墳説もある。古墳時代後期になると、伯耆谷の奥まった位置に平野古

編集後記

2020年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも6年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが2018年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわからないが、1994年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。(い)

表紙写真

- 上左 双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）
上中 第2回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）
上右 「つなプロ」風景（諫早直人撮影）
下 湯舟坂2号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）
裏表紙写真 湯舟坂2号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第33集

地域資源としての湯舟坂2号墳

編集 諫早 直人（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5
<https://kpu-his.jp/>
発行日 2025年3月6日
印刷 北斗プリント
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2